特集

# 木挽町狩野家の記録と学習

## Legacies of Learning: Archives from the Kobikichō Kanō Studio

**2021年2月9日(火)～3月21日(日)**
**東京国立博物館 本館特別1・2室**

**February 9 – March 21, 2021**
**Rooms T1 & T2, Japanese Gallery**
**Tokyo National Museum**

狩野派は、室町時代中期から明治時代初期まで続いた、日本絵画における代表的な流派の一つです。江戸幕府の御用絵師のなかでも、将軍への直じきのお目見えがかなう、最も高い身分を奥絵師といいますが、その筆頭を務め、画壇の中心的な役割を担ったのが、木挽町狩野家です。

歴代当主は、江戸城内の障壁画や贈答用絵画の制作、古画の鑑定、将軍家の子女への絵画教育などに加え、屋敷内に画所を設け、全国から5、60人もの弟子（門人）たちを集めて教育するなど、画壇において絶大な権威を誇りました。またその立場を最大限利用して、全国の諸大名や社寺が所有する古画・名画を取り寄せ、模写に励み、膨大な絵画情報を集積していたことが知られています。

東京国立博物館（以下、当館）には、この木挽町狩野家に伝来した5000件近い模本や下絵が収蔵されており、なかには、すでに原本が失われてしまった貴重な模本もあります。また、鑑定の際の所感を記したメモや、生き生きとした自由な筆線が残されていて、当時の絵師の息遣いを知ることのできる絶好の資料となっています。本特集では、この膨大な木挽町狩野家伝来資料の一部を、「記録と学習」というキーワードからご紹介いたします。本画とは異なる、模本や下絵ならではの魅力を発見いただければ幸いです。

Lasting from the 15th to 19th century, the Kanō school produced generation after generation of talented artists, eventually becoming one of history's most celebrated schools of Japanese painting. During the military rule of the Tokugawa shogunate (1603–1868), the Kobikichō branch of the Kanō school attained the highest rank available to artists and played a central role in shaping the art world of its time. Using works in the Museum's collection, this exhibition explores the significance of the Kobikichō Kanō studio's commissions, teaching activities, and copied materials.

第一章

# 木挽町狩野家のはじまりと奥絵師の御用

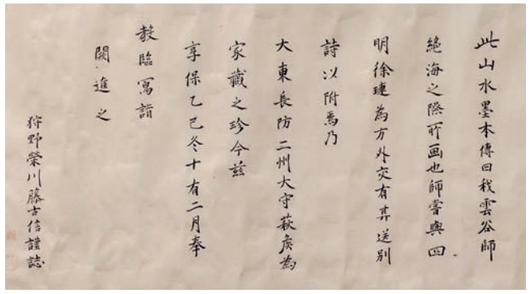
京都を中心に活動していた狩野派でしたが、元和三年（一六一七）、探幽が江戸幕府に召され、その後、弟の尚信と安信も召喚されたのを機に、活躍の場を江戸へと移します（巻末系図参照）。三人は幕府の画事を担う御用絵師に任ぜられ、旗本に匹敵する奥絵師の身分を与えられました。このうち、尚信に連なるのが木挽町狩野家です。探幽亡き後、二代常信は、幕府や宮廷の信頼を集めました。四代古信は八代将軍徳川吉宗に重用されます。六代典信は十代将軍家治や田沼意次に寵愛され、それまで拝領していた竹川町の屋敷に加え、木挽町（現在の東京都中央区銀座五丁目付近）の田沼邸の隣にも新たな屋敷を拝領しました。これを機に、木挽町狩野家と呼ばれるようになり、以降、隆盛をきわめました。

## 1 四季山水図巻（山水長巻）（模本）

原本は、十六メートルを超える長大な画面に、四季の移ろいや人びとの営み、山水の景観などを、ダイナミックに描いた雪舟の代表作。江戸時代に山水画の規範とされ、明治時代に入ると岡倉天心らにより、雪舟の最高傑作と称えられました。吉宗は、所有者の萩毛利家に命じて享保十年（一七二五）、「山水長巻」を江戸へ運ばせ、熟覧します。その際、古信に模写させたのが本図です。

吉宗は将軍就任後、全国の大名らに、所有する古画・名画を閲覧に供するよう号令をかけました。それらの模写を契機に、古信は吉宗に重用されるようになります。

巻頭部分



此山水墨本傳曰我雲谷師
絶海之際所画也師雪與四
明徐建為万外交有其送別
詩以附焉乃
大東長防二州大守萩廣為
家藏之珍今茲
享保乙巳冬十有二月奉
教臨寫詣
闕進之
狩野榮川藤古信謹誌

奥書部分

## 2 瀟湘八景図（模本）

「瀟湘八景」は中国江南地方、洞庭湖と湘江周辺の八つの景勝（山市晴嵐、遠浦帰帆、瀟湘夜雨、洞庭秋月、平沙落雁、江天暮雪）のこと。原本の牧谿筆「瀟湘八景図」は、多彩な水墨技法を駆使して湿潤な空気や光の明暗を巧みに描いた名品です。日本には画面の大小が異なる巻物が二セット（計十六図）入ってきていたようで、室町幕府三代将軍足利義満所有後、分断されて掛幅にされたと考えられています。

この模本は、常信と古信が、幕命により、各軸を所有者から借り受け、そのつど写したものです。常信は六図、古信は四図模写しています。原寸大で、所有者情報や寸法、表装の裂の文様や付属品についても、詳細に記しています。

①「平沙落雁（大）」古信模（享保13年〈1728〉9月）
原本：津山松平家旧蔵（現、東京・出光美術館蔵）

部分

吉宗による修正線

## 3 有徳院吉宗加筆鷹画草稿

吉宗は幼少より鷹を好み、古信を鷹狩などに随行させて多くの鷹図を描かせました。ここでは自ら筆をふるって、古信画の上に墨線で描き直し線を加えています。

④「遠寺晩鐘（大）」古信模（享保14年7月）
原本：紀州徳川家旧蔵（現、東京・畠山記念館蔵）

③「遠寺晩鐘（小）」古信模（享保14年〈1729〉5月）
原本：肥前松浦家旧蔵（現所蔵不明）

②「漁村夕照（大）」古信模（享保13年7月）
原本：伊予西条松平家旧蔵（現、東京・根津美術館蔵）

⑦「遠浦帰帆（小）」常信模（貞享元年〈1684〉9月）
原本：幕府旧蔵（現所蔵不明）

⑥「遠浦帰帆（大）」常信模（正徳2年〈1712〉2月）
原本：旧蔵不明（現、京都国立博物館蔵）

⑤「山市晴嵐（大）」模者不明（制作時期不明）
原本：旧蔵・現所蔵不明

⑩「平沙落雁（小）」常信模（貞享元年9月）
原本：幕府旧蔵（現所蔵不明）

⑨「洞庭秋月（小）」常信模（貞享元年9月）
原本：古河土井家旧蔵（現、愛知・徳川美術館蔵）

⑧「瀟湘夜雨（小）」常信模（寛文9年〈1669〉7月）
原本：土方家旧蔵（現、個人蔵）

⑫「瀟湘夜雨（小）」常信模（元禄5年〈1692〉1月）
原本：土方家旧蔵（現、個人蔵）

⑪「江天暮雪（小）」常信模（元禄4年〈1691〉3月）
原本：紀州徳川家旧蔵（現、京都・鹿苑寺蔵）

# 第二章 鑑定と模写

幕命による作画活動のほかに、奥絵師の重要な仕事だったのは教育と鑑定です。歴代当主はその膨大な画事を一人で請け負っていたわけではありませんでした。木挽町狩野家の屋敷には、組織的制作と門人育成のための画所が設立され、そこでは模写を通じた画技習得プログラムが組まれました。また、将軍や各大名が所有したり贈答に用いたりする名画には、品質保証として、奥絵師の鑑定書である添状が不可欠でした。鑑定を円滑に行なうためには、できるだけ多くの画家や画題の作品に触れ、自分のなかに鑑定の物差しをもっておくことが重要です。ここで大きな役割を果たしたのも模写です。鑑定記録としての模写は、また次の鑑定へ活かされ、結果として木挽町狩野家には大量の絵画情報が集積されました。ここでは記録と学習に用いられた模写の数々をご紹介いたします。

## コラム――❶ 伝禅月筆「羅漢図」の世代を超えた模写

禅月大師貫休は、中国の五代の蜀で活躍した画僧で、怪異な風貌と豪放な筆致が特徴の羅漢図で知られています。伝禅月筆の羅漢図は複数セットが存在し、鑑定の際に混乱が生じていたようです。当館所蔵の模本のもととなった十六幅対は、江戸時代には、三幅対などに仕立て直され、諸家に分蔵されていました。木挽町狩野家は、安永十年（一七八一）、寛政六年（一七九四）、文政十年（一八二七）などに、鑑定と模写を繰り返し、世代を超えて十五図まで図様を集めることに成功しています。鑑定、記録、学習、鑑定というサイクルを示す好例といえるでしょう。

| | 図様（模写制作者） | 模写時期 | 原本旧蔵 | 原本現所蔵者 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 第五尊者（橋本典邦） | 安永十年四月 | 松平小十郎（定胤か） | 東京・根津美術館 |
| 1 | 第七尊者（竹沢惟房）【No.8】 | | | 東京国立博物館か |
| 1 | 第八尊者（竹沢惟房） | | | 不明 |
| 1 | 第九尊者（橋本典邦） | | | |
| 2 | 第十五尊者（橋本典邦） | 十八世紀末か | 松平友盛（狩野岑信）その後、幕府 | 不明 |
| 2 | 第十六尊者（竹沢惟房） | | | |
| 2 | 不明（竹沢惟房） | | | |
| 3 | 第四尊者（小太郎義文） | 寛政六年十一月 | 雲州（松平不昧か） | 大阪・藤田美術館 |
| 3 | 第十三尊者（榮信）【No.9】 | | | |
| 3 | 第三尊者（早瀬圓筑） | | | |
| 4 | 第十三尊者（不明） | 享和三年八月 | 不明 | 東京・出光美術館 |
| 4 | 第十四尊者（石川惟友） | | | |
| 4 | 第十二尊者（養信）【No.10】 | 文政十年七月 | 伊予松平家家老 | 九州国立博物館 |
| 5 | 第二尊者（不明） | 不明 | 不明 | 東京・静嘉堂文庫美術館 |
| 6 | 第六尊者（不明） | | | |

伝禅月筆「羅漢図」の図様収集過程

10 羅漢図　第十二尊者（模本）

9 羅漢図　第十三尊者（模本）

8 羅漢図　第七尊者（模本）

## 4 唐画手鑑 第二帖

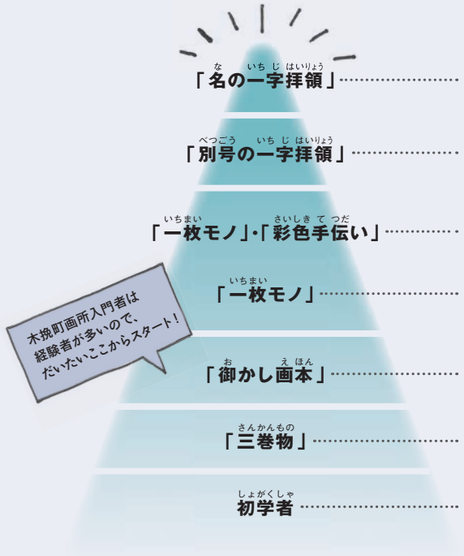
（常信模写）　（探幽模写）

江戸時代の日本において珍重されていた中国の名画を模写し、画帖に仕立てたもの。全四帖のうち、第三帖までに探幽、安信、常信、周信、古信、惟信の六名の模写が、第四帖に榮信、第一帖の裏面に養信が写した分がまとめられています。掲載の図は、梁楷筆「鷺図」（静岡・MOA美術館蔵）を探幽と常信がそれぞれ模写したものです。



## コラム――❷ 木挽町画所での門人教育

明治時代の日本画を牽引した狩野芳崖や橋本雅邦も木挽町画所の出身です。雅邦の述懐によると、当時から模本は大切に扱われていて、長老格の弟子が貸し出しを厳重にチェックし、点検と修繕も定期的に行なわれていたようです。また、各自が練習で描きためた模本の写しは郷里に持ち帰ることが許され、新たな手本として子弟の教育に用いられました。画所はいわば、当時のアカデミー的な存在であったといえます。




木挽町画所の修学過程

参考文献：橋本雅邦「木挽町画所」（『国華』第3号、1889年12月）

### 11 傅説図（模本） 初公開

左下に「養川十二歳写」とありますが、習熟段階としては「一枚モノ」と考えられます。

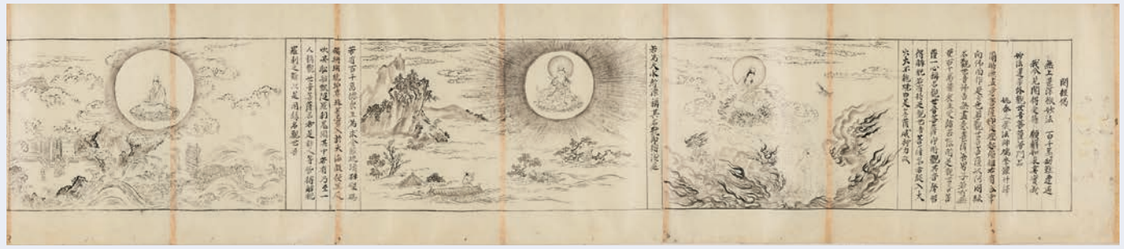
### 12 魚籃観音図（模本） 初公開

画中に「玉川十才写之」とあることから、養信は十歳で、すでに「一枚モノ」に進んでいたことがわかります。また、裏面に「玉七」という模本の管理番号が記されています。

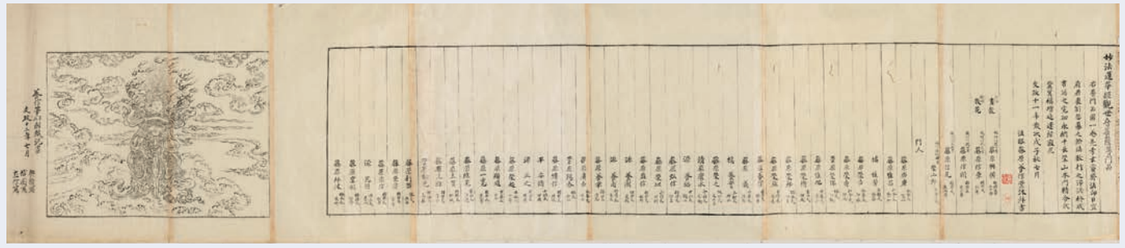
裏面「玉七」

### 13 観音経絵（模本） 初公開

「観音経絵」は『妙法蓮華経』第二十五「観世音菩薩普門品」（「観音経」）を絵画化したもので、養信が父・榮信追善のために制作しました。図の典拠は不明ですが、中国宋・元画の影響が見られ、巻末には跋文と門人名が続きます。榮信の一周忌に菩提寺の池上本門寺（東京）に奉納されましたが、東京大空襲で焼失しました。本図は養信の弟たちが制作した、その模本です。



No.13 第3紙〜第9紙

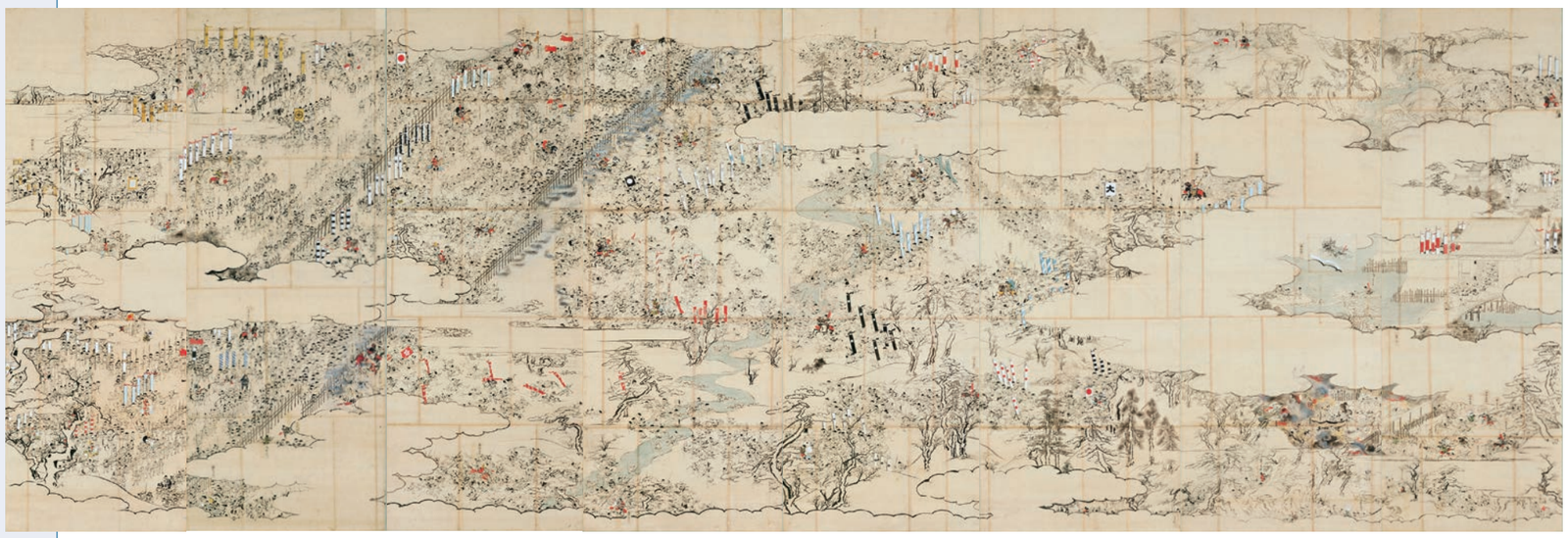


No.13 巻末部分

# 第三章 記録から創造へ

江戸時代の狩野派は、その粉本主義（模写の転用を重視した制作態度）を、しばしば批判的に評価されます。当時、絵の主たる発注者であった幕府や大名家は常に前例を重んじていました。このため、先の好例に準じた絵を描くことがよしとされ、絵師自身の独創性を発揮できる場は非常に限られていたといえます。それでも、新たな主題（新図）に取り組む際には、模本や写生から集積した膨大な絵画情報をもとに、心血を注いで制作にあたっていたようです。この章では、絵師たちの新図制作の様子と、それらを支えた記録やスケッチをご紹介いたします。

14 長篠合戦図屏風下絵



15 長久手合戦図屏風下絵 初公開

17 雑画帖 第一帖 初公開

榮信や養信が描きためたスケッチを貼りこんだもの。主題などでは分けられておらず、多くは制作時期不明ですが、犬や亀、草花など日常的に目に映ったものの記録としての側面が見て取れます。



## コラム——❸ 「公用日記」に見る長篠・長久手合戦図の新図制作

天正三年（一五七五）に三河国設楽原で勃発した武田勝頼と織田信長・徳川家康連合軍による「長篠の戦い」と、天正十二年（一五八四）に尾張国小牧・長久手を中心に展開した羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康による「小牧・長久手の戦い」は、徳川家にとって非常に重要な戦いと位置づけられ、江戸時代を通じて多くの合戦図が制作されました。

なかでも、惟信が受注した八曲一双の「長篠・長久手合戦図」は十一代将軍家斉周辺からの特別な御用で、「画様（図像）」は幕府関係者と面談のうえ、決定していたようです（『公用日記』天保五年二月二十九日条）。幕府から古地図や参考図を貸し与えられ、万全の態勢ではじまった制作でしたが、その進行は難航をきわめたようで、子である榮信が死去した際も、右隻「長篠合戦図」は「認めカケ」、すなわち草案までしか進んでおらず、左隻「長久手合戦図」はいまだ「白紙」。その後、孫の養信なども制作を続けたようですが、完成には至らなかったようです。これに関連する下絵がNo.14とNo.15と考えられ、いずれも複数個所の描き直しに、絵師たちの苦慮の跡が見えます。ほかの合戦図には見られない、戦闘の詳細な描写や生き生きとした人物の様子は特筆すべきもので、木挽町狩野家が心血を注いだ新図の好例といえるでしょう。

## コラム——❹ 古画を学んで描かれた「年中行事図屏風」

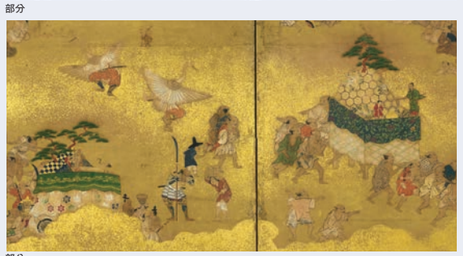
益信は探幽の養子で、駿河台狩野家の始祖となった絵師です。木挽町家とは別の狩野派の画家ですが、模本を手掛かりに制作した様子を知ることのできる実例として紹介します。

益信筆「年中行事図屏風」（No.23）は、模本ではなく鑑賞のために描かれた作品（本画）で、室町時代の「月次祭礼図屏風」を写した模本（No.22）に多くの共通する図柄を見出すことができます。両方を比較して見ることで、どこが古画を利用した部分か、どこが新しい図柄かがわかります。「月次祭礼図屏風」を写した部分は、抑揚のある曲線により、丸みのある柔らかい表現がなされていますが、益信が新しく描いた郭巨山や見物客の部分は、人物の個性や動きを抑制した直線的な筆さばきによる、穏やかな江戸狩野様式の描写になっています。

古画を模写して描いた部分と、絵師自身の画風で描かれた部分の作風の違いを、一つの作品の中に見出すことができます。

部分

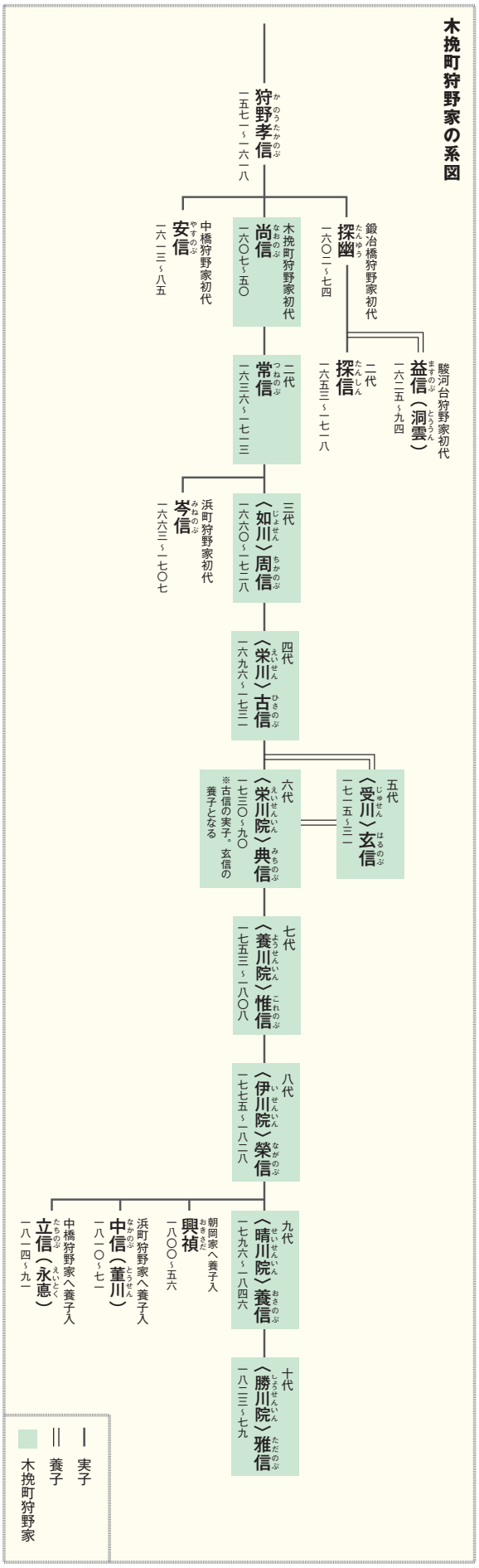
22 月次祭礼図屏風（模本）

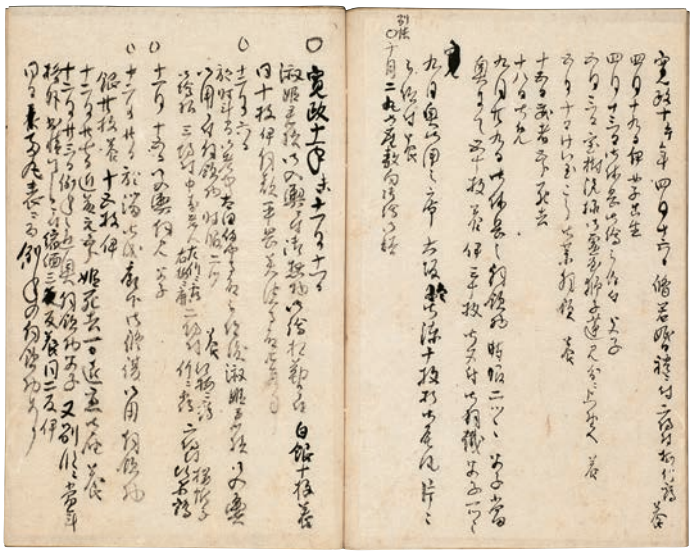


部分

23 年中行事図屏風

## 木挽町狩野家の系図



表紙

### 19 公用扣（こうようひかえ） 初公開

安永五年（一七七六）から文政五年（一八二二）までの木挽町狩野家の御用を記した記録。筆者は不明ですが、筆跡や内容から、典信、惟信、榮信ら歴代当主が重要事項を書き継いだものと考えられます。

## 展示作品リスト

| No. | 名称 | 作者 | 員数 | 時代 | 列品番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| **第一章** | **木挽町狩野家のはじまりと奥絵師の御用** | | | | |
| 1 | 四季山水図巻（山水長巻）（模本） | 狩野〈栄川〉古信模写<br>原本:雪舟等楊筆 | 1巻 | 江戸時代·享保10年（1725）<br>原本:室町時代·文明18年（1486） | A-2006 |
| 2 | 瀟湘八景図（模本） | 狩野常信、狩野〈栄川〉古信模写<br>原本:玉澗、牧谿筆 | 1巻 | 江戸時代·17～18世紀<br>原本:南宋時代·12世紀 | A-6745 |
| 3 | 有徳院吉宗加筆鷹画草稿 | 狩野〈栄川〉古信、徳川吉宗筆 | 1巻 | 江戸時代·18世紀 | A-4712-2 |
| **第二章** | **鑑定と模写** | | | | |
| 4 | 唐画手鑑 第二帖 | 狩野探幽、狩野常信模写 | 1帖 | 江戸時代·17世紀 | A-6742-2 |
| 5 | 唐画手鑑 第三帖 | 狩野安信、狩野常信、狩野〈如川〉周信、狩野〈栄川〉古信模写 | 1帖 | 江戸時代·17～18世紀 | A-6742-3 |
| 6 | 駒競行幸絵巻（模本）下巻 | 狩野〈晴川院〉養信模写 | 1巻 | 江戸時代·文政11年（1828）<br>原本:鎌倉時代·14世紀 | A-6914-2 |
| 7 | 遊行上人縁起絵巻（模本）巻第一 | 狩野〈晴川院〉養信、橋本養邦模写 | 1巻 | 江戸時代·天保2年（1831）<br>原本:鎌倉時代·14世紀 | A-1652-1 |
| 8 | 羅漢図（模本） | 竹澤惟房模写　原本:伝禅月筆 | 1枚 | 江戸時代·安永10年（1781）<br>原本:元時代·14世紀 | A-5082-2 |
| 9 | 羅漢図（模本） | 狩野〈伊川院〉榮信模写　原本:伝禅月筆 | 1枚 | 江戸時代·寛政6年（1794）<br>原本:元時代·14世紀 | A-5082-9 |
| 10 | 羅漢図（模本） | 狩野〈晴川院〉養信模写　原本:伝禅月筆 | 1枚 | 江戸時代·文政10年（1827）<br>原本:元時代·14世紀 | A-5082-13 |
| 11 | 傅説図（模本） | 狩野〈養川院〉惟信模写　原本:狩野探幽筆 | 1枚 | 江戸時代·明和元年（1764） | A-3371 |
| 12 | 魚籃観音図（模本） | 狩野〈晴川院〉養信模写　原本:狩野探幽筆 | 1枚 | 江戸時代·文化2年（1805） | A-3400 |
| 13 | 観音経絵（模本） | 朝岡興禎、狩野中信、狩野立信模写<br>原本:狩野〈晴川院〉養信筆 | 1巻 | 江戸時代·文政12年（1829）<br>原本:江戸時代·文政12年（1829） | A-4889 |
| **第三章** | **記録から創造へ** | | | | |
| 14 | 長篠合戦図屏風下絵 | 狩野〈養川院〉惟信、狩野〈伊川院〉榮信筆 | 8幅 | 江戸時代·18～19世紀 | A-9270 |
| 15 | 長久手合戦図屏風下絵 | | 8枚 | 江戸時代·19世紀 | A-9272 |
| 16 | 公用日記（文政十一戊子秋） | 狩野〈晴川院〉養信筆 | 1冊 | 江戸時代·文政11年（1828） | QA-3588-18 |
| 17 | 雑画帖 第一帖 | 狩野〈伊川院〉榮信、狩野〈晴川院〉養信筆 | 1帖 | 江戸時代·18～19世紀 | A-6783-1 |
| 18 | 雑画帖 第二帖 | 狩野〈伊川院〉榮信、狩野〈晴川院〉養信筆 | 1帖 | 江戸時代·18～19世紀 | A-6783-2 |
| 19 | 公用扣 | 狩野〈栄川院〉典信、狩野〈養川院〉惟信、狩野〈伊川院〉榮信筆 | 1冊 | 江戸時代·18～19世紀 | QA-3589 |
| 20 | 公用日記（天保十二辛丑年秋冬） | 狩野〈晴川院〉養信筆 | 1冊 | 江戸時代·天保12年（1841） | QA-3588-43 |
| 21 | 能舞台絵（江戸城障壁画下絵のうち） | 狩野〈勝川院〉雅信筆 | 1巻 | 江戸時代·19世紀 | A-6746 |
| 22 | 月次祭礼図屏風（模本） | 原本:伝土佐光信筆 | 6幅 | 江戸時代·19世紀<br>原本:室町時代·15世紀 | A-2425 |
| 23 | 年中行事図屏風 | 狩野益信筆 | 6曲1隻 | 江戸時代·17世紀 | A-12439 |

No.1は2/9～2/28のみ展示。


特集 木挽町狩野家の記録と学習

2021年2月9日発行

執筆: 金井裕子、田沢裕賀
展示企画: 大橋美織、金井裕子、瀬谷愛、田沢裕賀、土屋貴裕
翻訳: レベッカ·ハーモン
撮影: 藤瀬雄輔（以上、東京国立博物館）、西川夏永（奈良国立博物館）
城野誠治（東京文化財研究所）
研究協力: 加藤弘子（都留文科大学）、塚本麿充（東京大学）
戸矢浩子（学習院大学史料館）

デザイン·制作: D_CODE
印刷: 大日本印刷
編集·発行: 東京国立博物館


©2021東京国立博物館　Tokyo National Museum


＊本展は、JSPS科研費 JP17H00908の助成を受けたものです。

［表紙：No.15 長久手合戦図屏風］